

『花嫁はどこへ?』 憲法と映画(101)	(2025.5)
『教皇選挙』(2024年 アメリカ・イギリス合作) 憲法と映画(102)	(2025.6)
『金子差入店』 憲法と映画(103)	(2025.7)
『秋が来るとき』 フランス映画 憲法と映画(104)	(2025.8)

『花嫁はどこへ?』 憲法と映画(101) (2025. 5)

<の> (春日台)

インド映画と聞くと、上映時間が3時間はざらで、集団での歌や踊りが必ず入るという固定観念に囚われていませんか。この作品は約2時間と至って常識的な上映時間です。もちろん歌や踊りもありません。

満員列車に揺られて花婿と一緒に彼の嫁ぎ先の村へと列車で旅立つのですが、たまたま同じバールで顔を隠した別の花嫁と相席になったのが過ちの始まりでした。夜遅く目的の駅に着き慌てて花婿が花嫁の手を引いて降車し村に着いてバールを取って顔を見ると全くの別人ではありませんか。一方、寝入ってしまった当の花嫁は、9駅先の駅で別の男性に促されて降りたもののこちらも結婚相手と違うので、駅で見捨てられてしまいます。



携帯電話がほぼ普及している日本ならばお互いすぐに連絡を取り合ってその日のうちに問題は解決してしましますが、花婿も花嫁も携帯電話を持てるほど裕福ではありません。頼みの綱は地元の警察なのですが、お金を積まないとともに搜索してくれません。果たしてそんな二人が再び出会うことができるのか…。

映画に登場する人たちは、結婚詐欺を企む男以外みんな優しく親切です。駅で捨てられた花嫁を助けてくれるのは、駅の売店を営む女主人です。花婿の友達たちは花嫁を見つけてくれるように何度も警察に掛け合ってくれます。賄賂をもらうことしか関心ないと思われた警察署長は、取り違えられた別の花嫁が結婚詐欺で騙されたことが分かり、詐欺集団から彼女を救い希望する大学への進学をそっと後押ししてくれるのです。

映画は2人の花嫁をとおして、インドという国がいかにか女性の人権を軽視しているかを暗に告発しています。そして女性の自立や幸せの在り方を見事に描いています。

インドの人口は14億人を超えて世界一ですが、家族が選んだお見合い結婚が8割を超えています。21世紀の今も「カースト制度」が脈々と蔓延っていて、世襲制の職業と結びついた約3,000の集団があり同じ集団同士でないと結婚できないのです。

『教皇選挙』（2024年 アメリカ・イギリス合作）憲法と映画(102)

<の>（春日台）

フランシスコ・ローマ教皇が4月21日に88歳で亡くなりました。
2013年に選出されてから約12年間カトリック史上初の中南米出身の教皇でした。コンクラーベ(教皇選挙)で第266代教皇として信者14億人の頂点に選ばれたのです。同性婚カップルを認めたり、核兵器禁止条約をバチカンとして批准するなど改革派の教皇として知られています。2019年には日本も訪問しています。



時を同じくしてエドワード・ベルガー監督の『教皇選挙』が上映されています。ローマ教皇の死を予見したかのようなタイミングでの劇場公開です。教皇には、「枢機卿」と呼ばれる教皇の最高顧問約130名の互選で、2/3以上の票を獲得できなければなりません。しかも枢機卿は全員男性です。映画では、システーナ礼拝堂に鍵が掛けられて密室の中で選挙が行われる様子がリアルに描かれています。金属製で背の低い甕(かめ)の蓋に投票用紙を乗せて中に滑り落とす投票方法も映画で初めて知りました。教皇候補の若い時のスキャンダルが明らかになったり、多数派工作のための様々な陰謀が繰り広げられます。何度となく繰り返される選挙は、煙突から立ち上る煙の色で世界中に知らされますが、黒い煙(未選出)ばかりが立ち上ります。選挙責任者であるローレンス枢機卿の胸を締め付けられるような激しい息遣いは、観客と共鳴して緊張がピークに達します。まさにコンクラーベは「根比べ」です。映画ではアッと驚く人物が教皇に選ばれますが、未だご覧になっていない方のために結末は書かないでおくことにします。

現実の教皇選挙は、5月7日に開始されます。この原稿がホームページに載るころには新しい267代教皇が決まっていることでしょう。(5月1日記)

憲法と映画(103)『金子差入店』

<かな>（春日台）

恥ずかしい話ですが、こんな仕事があるなんて今まで知りませんでした。刑務所や拘置所に収容された受刑者に差し入れる物品や手紙などを依頼者に代わって代行するという「差入屋」という職業があるということに……。主人公の金子は、おじさんから店を引き継いで「差入屋」を営んでいます。幾ら代行業といえども被害者家族や世間からは常に白い目で見られる存在です。

ある時、息子の同級生の女子児童が通り魔の男によって惨殺されます。仲の良かった息子のことを思えば、殺してやりたいほどの憎い相手ですが、加害者の母親に頼まれて服役している通り魔に手紙や物を届けるために何度も面会に訪れます。そんな主人公の姿に息子は学校でいじめに遭い、妻も同級生の母親たちからシカトされます。店のガラス戸には嫌がらせの張り紙が張られ、植木鉢も何者かに何度も割られてしまいます。

息子を救いたい一心で感情をむき出しに学校に怒鳴り込みますが、逆に妻からその行為を詰られてしまいます。何もかも嫌になり店を畳みたくなった主人公に、「自分の思うとおりにやればいい」とおじに諭されます。ある日、仕事で拘置所に出向くと、面会申請のたびに断られる高校生に遭遇します。何故面会を断られるかは、一目瞭然、面会相手は母親を殺した男であり、高校生は殺された被害者の娘からです。高校生の願いを叶えるためにある秘策を思いつきます。

主人公の妻に真木よう子、おじさんに寺尾聡、児童を殺した通り魔に北村匠海、母親を殺した男に岸谷五朗、弁護士役に甲本雅裕と実力者を配置して犯罪者の心理にも踏み込んで映画をより深いものに仕上げています。



あなたは映画を最後まで観る派ですか、それともエンドロールが流れると席を立つ派ですか。この映画は映画館が明るくなるまで席を立たないで観ていただきたい、そんな映画です。

憲法と映画(104) 『秋が来るとき』フランス映画

<かな> (春日台)

皆さんは誰にも言えない秘密はあるでしょうか。

墓場まで持っていくと固く心に決めている秘密がありますかということです。傘寿を迎えた主人公の女性・ミシェルにはあるのです。

自然豊かなフランス・ブルゴーニュで一人暮らしを満喫している彼女は、広い敷地で野菜を栽培したりおしゃべりがしたければ車に乗って気の置けない友人・マリーのところに会いに出かける元気なおばあちゃんです。彼女にはシングルマザーとして苦労して育てた一人娘と男の子の孫がいます。久しぶりに帰省の知らせを聞いたミシェルは今か今かと帰りを待ちわび、お菓子を焼いたり近くの森に娘が好きなキノコを採りに出かけ



食卓に並べるのです。そこにはどこにでもあるありふれた日常がありました。ところが、キノコ料理を食べた娘が突然体調不良を起こして救急車で病院へ運ばれますが処置が早く事なきを得ます。そのことを許されない娘はその日に孫を連れてパリに帰ってしまいます。ミシェルは女手一つで生活費を稼ぐため娼婦までしてきた過去が徐々に明らかになってきます。そんな母を許せない気持ちを抱いたまま母娘の関係は、毒キノコの一件で決定的になってしまいます。

マリーの息子・ヴァンサンはミシェルを許すよう説得するために娘の住むパリのアパートへと単身向かいます。その時娘がベランダから転落する「事故」が起こり、警察の捜査で防犯カメラに風防を被ったヴァンサンらしき男が写っていることが分かります。警察はミシェルに事情を聴くためにやってきますが「その日、ヴァンサンは家の庭仕事を手伝ってくれていた。パリには行っていない。」とウソのアリバイを証言します。残り少ない人生を穏やかに過ごすために彼女が選択した大きな決断でした。

孫を引き取った数年後にヴァンサンと孫そしてミシェルは3人で家の近くの森へ散策に出かけます。2人に逸れたミシェルは、彼女が望んだように森に抱かれて眠るように息を引き取るのです。